

聖書：Iサムエル21：1～15

説教題：ガテで捕らえられて

日時：2017年1月8日（夕拝）

この章からダビデの本格的な逃亡生活が始まります。その彼がさっそく厳しい状況に投げ入れられたことがここに記されています。彼はまずノブの祭司アヒメレクのところへ行きます。するとアヒメレクは恐る恐るダビデを迎えながらこう言います。「なぜ、おひとりで、だれもお供がいないのですか。」ダビデは答えます。「私が一人なのは、王によって内密に遣わされているからだ。今、供の者がいないのは、これから落ち合う予定だからだ。」と。そして願い出ます。「今、お手元に何かあったら、パンでも何か、あるものを私にください。」この時のことについてイエス様が福音書で引用している箇所があり、そこでは「ダビデがひもじかった時」と言われています。つまりダビデはこの時、空腹だったのです。腹ペコだったのです。何でもいから食べ物をもとめなくてはならない状態だったのです。祭司は「普通のパンは手元になく、聖別されたパンならあります。しかしそれは女から遠ざかっているなら差し上げることができます。」と言います。するとダビデは、確かにその条件を我々はクリアーしていると言います。そして祭司から聖別されたパンを受け取ったと記されています。

私たちは思わず当惑してしまいます。ダビデが話したことはウソではないのか。少なくともサウル王に遣わされたと言っているのは、どう考えても偽りではないのか。その彼にこうしてパンが与えられたということは、こういう状況ではウソも許されると聖書は言っているのかと。先に触れたように、後にイエス様がこの出来事を引用して語っておられる言葉があります。マタイの福音書では12章3～4節に出て来ます。しかしイエス様はそこで、ひもじい状態にあったダビデに祭司が儀式的なパンを与えたことは正しいと言っているだけであって、そのパンを得るためにダビデが取った言動については何も述べてはいません。つまりダビデのこの行動を推薦したり、承認することは何も言われていないのです。

7節にはサウルのしもべドエグのことが短く触れられています。これは次の22章の出来事の伏線となっています。それについては次回に見たいと思います。そして8節以降では武器を調達した様子が記されています。ダビデは「あなたの手元に、槍か、剣はあ

りませんか。」と問います。いくら密かに遣わされた特命大使であっても、普通は何らかの武具は身に着けているはずでしょう。しかしダビデは「王の命令があまり急だったので」と説明します。なかなか苦しい理由づけです。するとそこにあのゴリヤテの剣がありました。ダビデは「それは何よりです。私に下さい。」と言って受け取ります。こうしてダビデはノブの町で最低限の食料と武器とを調達できました。その方法は偽りを述べることによってです。果たして私たちはこれをどう読んだら良いのでしょうか。

とりあえず先に進みます。今日の章二つ目のエピソードが10節から記されています。ダビデはその後、ガテの王アキシユのところへ行きます。これはペリシテ人の王です。国内にはどこも安全な場所はなく、敵国に入って行く方がまだ安全と彼は考えたのでしょうか。本来、護衛兵がたくさん付いているわけではない状態で、ペリシテの地に入っていくことはとても危険です。飛んで火にいる夏の虫になりかねません。しかしそうするより他に道なしと判断せざるを得ないほどダビデは追い詰められた状態にあったのでしょうか。彼はどんな期待を持ってこの地に入ってしまったのでしょうか。そっと目立たないように入って行けば誰にも気づかれまいと思ったのでしょうか。ところが人々はすぐにダビデだと気がつきます。「この人は、あの国の王ダビデではありませんか」と。ダビデは人々の言葉を非常に恐れました。そこで彼が取った策は気が違ったかのように振る舞うことでした。当時、気違いは神の霊あるいは悪の霊の働きによると考えられ、そういう人を捕らえ、拘束すると、その人に取りついている霊の力によって自分たちにどんな災いが降りかかるか分からない、だから関わらない方が良くと人々は考えました。ダビデはその線で行くことにしたのです。やはりまず捕らえられてしまいます。敵の手に捕まってしまいます！絶体絶命の大ピンチです！ダビデはいよいよ激しく演技します。注解者たちは、ダビデは狂いわめくサウルの姿を近くで見て来たので迫力万点の演技ができたことだろうと言います。しかし当然ながら、これは楽しい演劇会ではありません。門の扉に傷をつけたり、ひげによだれを流したり、・・・。一世一代の狂態を演じつつ、よだれの合間からアキシユの顔色を盗み見するダビデの心中はいかばかりだったでしょう。しかしこうして彼はこの場を切り抜けます。そして次章最初の節にあるようにアドラムのほら穴へと避難するに至るのです。

果たして私たちはこの章から何を学ぶことができるのでしょうか。まず私たちがこの章を読んで分かること、それはダビデはこのような苦しい中を通らされたということです。

サウル王から追われて流浪の旅に出たかと思った途端、彼はみじめで困窮した状況に置かれました。また危険で悲しい状況に置かれました。まさに死の陰の谷を歩くような状況でした。私たちはまずこのダビデの状況を良く思い巡らすべきではないでしょうか。彼は神の人、信仰の人として、いつもまく事が運んだわけではなかったのです。このことを思う時に、苦しい生活を強いられているのは私だけではないということを思います。私たちが色々大変な中を通っているかもしれません。日々つらい経験を味わっているかもしれません。しかしあのダビデもこのような中に置かれたのです。そのことを思う時に、私たちはどんなに苦しい状況に置かれたとしても、勝手に失望してはならないと思わされます。神に用いられたダビデはもっとひどく、みじめな状態を経験したのです。

しかし私たちがこの章を読んで大いに気になることの一つは、この章における彼の行動をどう評価したら良いのかということでしょう。特に彼がここで偽りを述べたことを、道徳的にどう考えたら良いのかと。私たちが区別して考えるべきは、聖書に記されているある信仰者の行動は、神がそれを承認しているということを必ずしも意味しないということですが、むしろ聖書は事実を述べているだけという場合が良くあります。ですからここでダビデが偽りを述べたことが記されているからと言って、神がこれを是認しているということにはなりません。やはりウソはウソです。真実な神とウソは両立しません。「ウソも方便」という考え方は聖書からは支持されません。そういう意味でこれはダビデの弱さ、罪を示しています。だとすると私たちが不満に思うのは、どうしてそのダビデの罪がここでさばかれていないのかということでしょう。もしここにその刈り取りがいくらかでも示されているなら私たちの頭はスッキリします。やはりウソは良くないことであり、神に罰されることなのだ。しかしこの章の成り行きはそうなっていません。結局ダビデは求めたパンを得、また剣を手に入れています。またアキシュの前で大ピンチに陥りましたが、無事解放されています。すると私たちの心は落ち着かなくなってくるのです。神は一体これをどう考えておられるのか。なぜパンが与えられたままでおとがめなしなのかと。しかし私たちはこのことを自分に当てはめてみたらどうなるでしょうか。私たちは毎日食べ物を与えられています、それは私がそれだけふさわしい生活を神の前にしているからなのでしょう。私たちが必要なものを備えられ、日々守られているのは、その祝福を受けるに値する生活をいつも私たちが送っているからなのでしょう。そうではないでしょう。むしろ私たちが日々の糧を受けているのは、私の敬虔な

歩みのゆえではなく、主なる神の恵み深さゆえなのではないでしょうか。日々たくさんの罪を犯している者であるにもかかわらず、分不相応な恵みで日々守られ、養われている私たちです。だとすればダビデに対してだけ、なぜ神はすぐ罰さないのかと口をとがらせるのは、偏った見方ではないでしょうか。私たちは自分もまたダビデと同じであることを思うべきではないでしょうか。そしてこんな者を今日もあわれみ、支えてくださっている神を見上げて、御名を賛美する方がふさわしいあり方なのではないでしょうか。

三つ目に見たいことは、確かにこの章のダビデには不完全さがあり、大きな欠けがあることは事実ですが、そこには信仰もあったということです。そのことは詩篇 34 篇と 56 篇を参照する時に分かります。この二つの詩篇の表題を見ると、どちらもこのガテで捕らえられた時に歌った歌であることが分かります。まず詩篇 34 篇。表題に「ダビデによる。彼がアビメレクの前で気が違ったかのようにふるまい、彼に追われて去ったとき」とあります。「アビメレク」とはペリシテの王の称号であり、具体的には今日の章に記されていたアキシシュを指しています。この詩篇全部を読むわけには行きませんが、ざっと見ますと、ダビデはこの苦境において主に求めたことが分かります。4 節：「私が主を求めると、主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い出してくださいました。」6 節：「この悩む者が呼ばわったとき、主は聞かれた。こうして、主はすべての苦しみから彼を救われた。」11 節以降では、この時の自分の経験は、主が他のご自身の民にも同じようにして下さることであるということが述べられています。それゆえ冒頭の 1~3 節では主を誉め讃えよう！と歌われています。もう一つは詩篇 56 篇。こちらの表題を見ると、その最後の部分に「ペリシテ人が、ガテでダビデを捕らえたときに」とあります。この詩はまず「神よ。私をあわれんでください。」という祈りで始まって 3~4 節にこう語られています。「恐れのある日に、私は、あなたに信頼します。神にあって、私はみことばを、ほめたたえます。私は神に信頼し、何も恐れません。肉なる者が、私に何をなしてまいしょう。」11 節：「私は、神に信頼しています。それゆえ、恐れません。人が、私に何をなしてまいしょう。」今日開いているサムエル記 21 章を見るだけでは、ダビデはただ人間的な知恵、人間的な技巧に頼っただけのようにも見えました。信仰はここに全くなかったかのようにも見えました。しかし彼はここで信仰の苦闘を経験していたのです。ひげによだれを垂らしながらも、必死に神に祈り求めていた。そしてこの時の格闘から詩篇が二つも作られたのです。この体験を通して後に神の民を励ます賛美が二つもできたのです。

それゆえ結論として私たちがこの章から学ぶことは、ダビデの様々な弱さにもかかわらず、神が彼をこの苦境の中で守ってくださったということではないでしょうか。そして私たちはこのことを自分のこれまでの生活に重ね合わせる時に良く分かるのではないのでしょうか。確かにこの章には罪を犯してしまったダビデの姿が示されています。それでも彼が守られたということは、私たちが危急の時にはウソをついてもいいということではありません。それは神の前に正しいことではありません。しかし神はあわれみをもって彼を導いてくださった。私たちも同じでしょう。今、新しい 2017 年を歩み始めています。もし私たちが昨年犯した罪を全部一つ一つ取り上げられて、それに対する報いを一つ一つ受けていたら今ごろこうして生きてはいないことでしょう。多くの大小の罪を犯したにも関わらず、今日こうして生かされている私たちです。これはダビデと同じではないでしょうか。今日かくあるはただ神の恵み！と私たちも神を賛美すべきではないでしょうか。それゆえこの章を通して私たちが一番心に思うべきは、どんな苦境に陥っても、たとえどん底の生活に陥っても、この神を見上げることによって希望を投げ捨てないということです。ダビデがこのような中に置かれても、彼は神によって守られたのです。振り返ってみれば、私たちもそれぞれ非常な苦境の中に置かれた時があったと思います。そして私たちがそこで必ずしも立派な姿を示したわけではなかったのに、ただ神のあわれみによってそこを切り抜け、守られて来たことがあったのではないのでしょうか。その神がこの新しい年も私たちとともにいて導いてくださるのです。たとえ苦しく、みじめな状況に突き落とされるようなことがあっても、神がそこにいて私を導いてくださる。むしろそこで私を訓練し、鍛え上げ、それを貴重な学びの機会とし、私たちの口に新しい賛美を授けてくださる。その方がおられることを感謝して、この年もこの神に従う生活をささげて行きたいのです。「あなたは、私のいのちを死から、まことに私の足を、つまずきから、救い出してくださいました。それは、私が、いのちの光のうちに、神の御前を歩むためでした。」(詩篇 56 : 13)